中務集注釈（三）

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・時田麻子・曾和由記子

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本稿では、本紀要前号「中務集注釈（二）」（六〇～一一〇番）に続き、一一一番歌～一五四番歌を扱った。『中務集』は、約二五〇首を収載し、屏風歌、歌合歌、賀歌の公的な歌と同時に、私的な贈答歌も多く含む。こうした中に、歌の様々な詠まれ方が見られるが、前稿一〇八番詞書「入れ文字の歌」について他例がない特徴的な詠歌方法と記した点について、浅田徹氏からこうした例（趣向）の存在を押さえておくべきとのご指摘をいただいた。今後さらに検討を加えたい。

本稿は、大学院演習および研究会での発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋し、注釈を施した。また、歌の解釈に問題点が少ない歌に関しては、校訂本文と通釈のみ記した。

「中務集注釈（二）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げる。

各歌の文責を次に示す。一一一～一一六番（時田）、一一七～一二二、一五〇～一五四番（加藤）、一二三～一二八、一四〇～一四四番（高野瀬）、一二九～一三三、一四五～一四九番（森田）、一三四～一三九番（曾和）。

凡例

一　本注釈は、資経本（冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収）を底本とする。

二　本文の校合に用いた本は、以下の通り（（　）内は、異同を掲出する際の略称）。

宮内庁書陵蔵本（510・12）（御）※原稿中では、御所本と称す。
西本願寺本（西）
前田家蔵 伝西行筆本（前）
奈良女子大学蔵本（歌）

三　和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改め

た。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四　底本を校合本によって校訂した箇所は、［語釈］もしくは、［補説］に、その理由と共に明記した。

五　歌の解釈に問題点が少なく、［異同］［他出］［語釈］を記さない歌に関しては、校訂本文と［通釈］のみを記載する。

一一一番歌

前栽に鈴虫を放ちたるに、いたく鳴きしに

草枕寝るをりもなく鈴虫は鳴くを旅寝に明かすなりけり

［通釈］　前栽に鈴虫を放ったところ、しきりに鳴いたので草枕に寝る時もなく、鈴虫は鳴くことを旅寝として（夜を）明かすのであった。

一一二番歌

月のあかきよ雁の声を聞て

明け方になるまで月をみざりせば初雁の音をたれかつげまし

［通釈］　月の明るい夜、雁の声を聞いて明け方になるまで月をみていなかったならば、初雁の鳴き声を誰が伝えるでしょうか。

一一三番歌

月のあかきよ菊の花さかり□なり

うつろはばことに見えまし白菊の色にかはらぬ冬の夜の月

［異同］　さか□→さかり（御）底本の不鮮明箇所を御所本にて校訂（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈等］　○うつろふ　映発、月の光が菊に映っている状態。「庭のおもにうつろふ花のいろいろに隈なく見ゆる秋の夜の月（経信・九五）」など。○白菊　「うつろはんときや見わかん冬のよの霜とひとつにみゆる白菊」（順・二四六）、「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花」（古今・秋下・二七七　躬恒）のように、その色から霜とともに詠まれることが多い。また、霜がおくことで紫色に変色するという特質もある。○冬の夜の月　「あまのはらそらさへさえやまさるらむこほりと見ゆる冬のよの月」（拾遺・冬・二四二　恵慶）のように、冬の夜の寒さから、「氷」を連想させるものが多い。「いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり（拾遺・雑秋・一一四六　元輔）」と、春の花と並び称する歌もある。当該歌は、月の色と白菊の色とを同一視する趣向である。月の色は、和歌を見る限り当時は白と考えられていたようであり、中務以前にも「月夜にはそれとも見えず梅花香をたづねてぞしるべかりける」（古今・春上・四〇　躬恒）のように、白梅と月の光色を同一視する歌がみられる。「我が宿の梅のはつはな昼は雪夜は月とも見えまがふかな」（後撰・春上・二六　よみ人しらず）

は白梅・雪・月の色を同一視する歌である。

［通釈］　月の明るい夜、菊の花が盛りだ

菊と月光の白が映発しあったならば、殊更に美しく見えるだろう。

この白菊の色と変わらない冬の夜の月よ。

［補説］　菊と「うつろふ」の語が同時に詠みこまれる場合「秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば（古今・秋下・二七九　平貞文）」のように、残菊の生じる紫色を賞美するものが多い。しかし、当該歌では主体は「冬の夜の月」である。詞書を踏まえ、歌意が通るように解釈するため、「映発する」という意味の「映ろふ」を採った。

一一四番歌

十二月の庚申に鶯なく

散りまがふ雪をはなにてうぐひすは春より先に鳴くにやあるらん

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈等］　○庚申　庚申待ち。庚申の夜に眠ると、体内の三尸虫がその隙に抜け出て、天帝に悪事を告げてしまう、という道教の伝承によるもの。徹夜をすることになるので、管絃をはじめとした遊びが行われた。中務の活躍時期は長く、この表現のみでは詠歌年代は特定しがたい。○（十二月の）鶯　鶯は、多く春の訪れを告げる鳥、すなわち初春の景物として詠まれているが、当該歌においては、冬のうち（春より先）に鶯が鳴くという表現となっている。「春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞ鳴く」（古今・春上・六　素性）等。○散りまがふ　散り乱れる、散ったものを他のものに見誤る。当該歌の場合は、雪を花と見誤るという趣向である。「いかで人なづけそめけむふる雪は花とのみこそ散りまがひけれ」（貫之・三一四）「おなじ色に散りまがふとも梅花かをふりかくす雪なかりけり」（貫之・五〇一）などが同趣の歌として挙げられる。

［通釈］　十二月の庚申の日に鶯が鳴く

散り乱れる雪を花と見まがって、鶯は春が来るより先に鳴いているのだろうか。

一一五番歌

説経するところにて風などふく

のりをとくはる日かなしき風の音にこほりばかりとおもひけるかな

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈等］　○説経　「説経」の場であることを示した詞書は少ない。「左大将済時、白河に説経せさせ侍りけるに（拾遺・哀傷・一三四〇詞書実方）」○のりをとく　「説く」と「解く」の掛詞。氷が「解く」春であるにもかかわらず、氷ばかりである、とする言語遊戯的な表現である。○こほり　底本「こほり」とすると名詞として読むことになるが、歌意がとりづらい。［補説］参照。「とく」「はる」は氷の縁語として用いたものか。春に氷を詠むものは多く「とく」「きゆ」を伴い、氷が溶けるということに春の訪れを感じる趣向である。これは「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」（古今・春上・一　貫之）

のように『礼記』「月令」の「孟春の月、東風凍を解く」をふまえたものの流れを汲んでいると考えられるが、当該歌は逆に、氷がとけるはずの春にもかかわらず氷ばかりであるという趣向となっている。

［通釈］説経するところで、風など吹く

仏法を説く春の日、悲しい風の音に、本来なら融けるはずの氷ばかりだと思ったことよ。

［補説］底本のままでは意味がとりづらい「こほり」という表現について、木船注釈では「こほる」の誤写かとする。同時代よりは降るが、釈教歌には「氷」を詠みこんだものが見られる。「おもひとくこころひとつになりぬればこほりも水もへだてざりけり」（千載・釈教・一二三七式子内親王家中将）また、『摩訶止観』には「無明転為明如融氷成水」という文言があり、法問百首の中にはこれを踏まえた「春風に氷とけゆく冷水や心の中にすましてぞみる」（法問百首・一）という歌もある。中務が「氷」を詠みこんだのも、こういった「無明」の状態を想定してのことであろう。

一一六番歌

花ちる夜

しらゆきもまだしらゆきが見えながら花はかたえぞ枝にのこれる

［異同］なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈等］○花と白雪　冬の終わり、春の始まりの時期に、花と雪がともに詠まれる趣向は多い。「いづれをかわきてをらましむめのはなえだもたわわにふれるしらゆき（躬恒・三七一）」、「白雪にふりかくされて梅花人しれずこそにほふべらなれ（貫之・二六六）」○かたえ　片枝。部分的に。当該歌では「かたえぞ枝」とあるので「かたへ（片方）」を当てるのが妥当か。

［通釈］花散る夜

白雪のように花が散るのが見えている折に、花は一部分だけ枝に残っていることよ。

［補説］底本の上句「しらゆきもまたしらゆきかみえなから」は、意味が非常にとりづらい。花が散る段階になってもまだ雪が残るという歌意と考えられるが、初句「白雪も」との接続は悪い。木船注釈では「か」を「と」の誤写と考え校訂している。

また、木船注釈においては、「さくらの片方の枝の花は、地上に散りしき、白雪が降り敷いてまだ消えずに残っている、としか見えないのに、さくらの片方の枝の花は、咲き残っている」と、花が散ったさまを雪に見立てたものと解釈している。詞書の「花ちる夜」にひかれたものか。

一一七番

「花の面白、いでて見よ」とあれど、風おこりて

吹きてしも散らすべきにはあらねども花見につつむ事のわびしさ

［異同］なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○風おこりて　風邪をひいて。「おこる」は、病が生じること。「十月、くまのへまで侍し道に、かぜおこりて二三日侍も、あひなうお

もひたまへしられ、にしをみ侍て（山田・二五詞書）」。○吹きてしも「しも」は、打消しをともなう場合「特に～というわけではない」といった含みを持ち、和歌でも例が多い。「わがためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけばまづぞかなしき（古今・秋上・一八六　よみ人しらず）」。○つつむ　遠慮する意。ここでは部屋の奥にこもって花見への参加を遠慮するということ。「身のならん事をもしらずこぐ舟は浪の心もつつまざりけり（後撰・恋五・九五九　源清蔭）」。

［通釈］「なんと花が美しいこと。（端の方に）出てながめなさい」という言葉があったけれど、風邪をひいて

（風といっても）吹いて花を散らすような風ではないけれども、花見に遠慮することのなんとつらいことか。

［補説］「花」は桜をさすか。花を散らす恨めしい風は、たとえば、

花ちらす風のやどりはたれかしる我にをしへよ行きてうらみむ

（古今・春下・七六　素性）

山たかみみつつわがこしさくら花風は心にまかすべらなり

（古今・春下・八七　貫之）

などと詠まれている。当該歌では、花を散らす風のために花を見ることができないのではなく、風邪をひいたために花見ができないことが恨めしい、と詠んだところにおもしろさがある。

一一八番

琴を弾きあかして

聞く人もなきあかつきに弾く琴は鳥の音ならであふものぞなき

［通釈］琴を弾いて夜を明かして

聞く人もいない明け方に弾く琴は、鶏の声のほかにはあうものがないのであったよ。

一一九番

ほととぎす、ただ一声を

飽くまでも声を聞かせでほととぎす待たぬ山にや今朝は鳴くらん

［通釈］郭公、ただ一声を（聞いて）

ここには心ゆくまで声を聞かせないで、ほととぎすは、誰も待っていない山で今朝は鳴いているのだろうか。

一二〇番

池にのぞける藤を

藤波の岸より高く見えながら水のおもてにのどかなるかな

［異同］なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○のぞける　さしかかる意。○岸より高く　藤が岸より高い位置に咲いていることをあらわすとともに、波が高いこともあらわしている。「松がえに咲きてかかれる藤浪を今は松山こすかとぞみる（貫之集・三二七）」「こぐ舟もきしのふぢ浪たかければまづこころをぞよすべかりける（恵慶集・一七）」。○のどかなるかな　波が立たずおだやかな

水面に風景が映る様子を詠んだ歌として次のような歌がある。「水のおもにやどれる月ののどけきはなみゐて人のねぬよなればか（拾遺・雑秋・一一〇七　順）」。

［通釈］　池にさしかかるように咲いている藤を

藤波は岸よりも高く見えているのに、池の面にはのどかに映っているよ。

［補説］　岸より高い波がくるということは穏やかではないが、波といっても藤波なので岸より高い波であっても水面は穏やかであると詠む。実際の景では岸に咲く藤が水に映っているだけだが、藤を波に見立て、言葉の上で上の句と下の句で詠まれたことが矛盾しているかのように詠んだところにこの歌のおもしろさがある。

一二一番

紫の色もかはらぬ藤波は岸に寄せてもかへらざりけり

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈］　○かへらざりけり　波が返らないことと、色があせないこととを掛ける。「かへる」が「色あせる」という意味を表した例に次のような歌がある。「限なく思ひそめてし紅の人をあくにぞかへらざりける（拾遺・恋五・九七八　よみ人しらず）」

［通釈］

紫の色も変わらない藤波は、岸に寄せても返ることもなく、色あせることもない。

［補説］　波といっても藤波なので寄せても返ることもない。『古今集』に次のような歌がある。「あしたづのたてる河辺を吹く風によせてかへらぬ浪かとぞ見る（雑歌上・九一九　貫之）」。実際の波は寄せて返るものだが、鶴を白波によそえているので、その波は河辺に寄せても返ってくることがないと詠んでいる。中務のこの歌も同趣向であり、さらに掛詞によって藤波の紫は色あせることもないと詠む。

一二二番

九月九日

年ごとに今日はおもてぞはづかしき若ゆときくの露もかひなし

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈］　○九月九日　九月九日の節句、重陽節。重陽とは陽数の九が重なる意。中国の故事の影響により、菊の花には邪気を払う力があると信じられていた。菊酒を飲んで長寿を祈ったり、菊の花の露と香をしみこませた綿で体をぬぐうと延年の効果があるとされた。「九月九日老いたる女菊しておもてのごひたる／けふまでに我をおもへば菊の上の露は千年の玉にざりける（貫之集・三二一）」。○若ゆ　若返る意。「よろづよをわかゆるきくぞおくつゆのまゆをひらくるときはきにけり（忠見・二四）」。○きく　「聞く」と「菊」とを掛ける。「おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし（古今・恋一・四七〇　素性）」。

［通釈］　九月九日

年を重ねるごとに今日九月九日は、年老いた顔が恥ずかしい。若返

ると聞く菊の露もその効果がない。

［補説］　九月九日に老いを嘆く歌としては、「長月のここぬかごとにつむ菊の花もかひなくおいにけるかな（拾遺・秋・一八五　躬恒）」などがある。この歌は、菊の花にあやかることなく老いていく身を嘆いている。当該歌も、老いを拭い去ることができるという菊の露がしみこんだ綿でいくら顔を拭っても、そのかいもなく老いてゆくことを嘆く。底本二七番歌、「菊のわたして、かほのごふ女あり／をいにける身にはしるしも白菊の露のなだてになりぬべきかな」も同趣。

一二三～一二六番歌

円融院御時に、「鶯郭公いづれ優れり」とくらべさせ給ひしに、仰せ事にて召しし四首

氷とく風ににほへる梅が枝にほのかになきし鶯の声

鶯の鳴く声をこそしるべにて花てふ花もさきはじむめれ

鶯の花に木づたふ移り香に訪ふそでさへもにほひぬるかな

散る花になほ飽かずとて鶯の幾世の春をなきてへぬらん

［異同］（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈］　○円融院　村上天皇第五皇子、母は中宮安子。康保四（九六七）年冷泉天皇の皇太弟、安和二（九六九）年即位、永観二（九八四）年譲位。中宮は兼通女媓子、媓子没後は頼忠女遵子。女御詮子（兼家女）が懐仁（一条天皇）を産む。退位後は出家して御願寺の円融院に入り、正暦二年二月十二日崩御。和歌をたしなみ、人々の追慕も深い人柄であった。○仰せ事にて召しし四首　天皇のご命令でお召しになった歌、四首の意。「四首」とは一二三～六番の鶯詠を指すと見られるが、続く一二七・八番の「郭公」二首も、同じ折の歌と考えられる。或いは「四首」の前に「鶯」があり、脱落したものか。［補説］参照。○鶯の鳴く声をこそしるべにて　鶯の鳴く声を道案内として。「鶯のなきかへるねをしるべにて春の行方をしるよしもがな」（信明・三五）○鶯の花に木づたふ移り香　鶯が、梅花の枝から枝へと伝い移るうちに、鶯の体に移りしむ梅花の香。「袖垂而伊射吾苑尓鶯乃木伝令落梅花見尓（万葉・巻十九・四二七七　藤原永手）」○幾世の　底本「よ」の部分虫損。御所本により補う。

［通釈］

円融院の御時に、「鶯と郭公はどちらが優っているか」と競わせなさった時に、ご命令でお召しになった四首

氷を溶かす東風に美しく咲いて匂っている梅の枝で、ほのかに鳴いた鶯の声よ。　（一二三）

鶯の鳴く声をこそ春を知る道案内として、すべての花という花も咲き始めるようだ。　（一二四）

鶯が梅の枝から枝へ伝い移るうちにその身に移る梅の香によって、訪ねる相手の袖までも香ることだ。　（一二五）

散る花をなお飽き足りないと言って、鶯は、幾世の春を鳴いて過ごしているのだろうか。　（一二六）

［補説］　円融天皇が鶯と郭公の優劣を競わせた時の歌。詳細は一二七・一二八番歌の［補説］に譲るが、この四首は、早春から花の終わりまでの季節の中で、鶯の優れた風情を、詠んだものである。四首とも主旨は明快な歌ではあるが、細部に中務らしい技巧が見られ、一部に問題点も

無いではない。

一二三番歌は、「春風に溶ける氷」「風が運ぶ梅花の香り」「梅の枝に鳴く鶯の初々しい声」という三つの景を詠み込んでおり、同様に鶯の初声を賛美する次の二首よりも、早春の美が凝縮されていると言えよう。

氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声
（拾遺・春上・六　源順）

梅がえにむすぶ氷も春たてばとくときつる鶯のこゑ
（高遠・三二五）

同じく一二四番歌は、『古今集』春上の一三、一四番歌、

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる（紀友則）

鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰かしらまし（大江千里）

の二首を併せたような内容であるが、鶯の声で春を知るのは人ではなく花で、鶯が華麗な花の季節を導くという発想が美しい。

一二五番歌では、四句の「訪ふ」の主語が問題になろう。人が鶯を訪うのか、それとも鶯は女性の許を訪れる男性のイメージなのか。語釈の『万葉集』藤原永手の歌（拾遺集・春上・二一も同歌）や、

折りつれば袖こそにほへ梅の花有りとやここに鶯のなく
（古今・春上・三二　よみ人しらず）

鶯の木伝ふ枝をたづぬとも花のすみかをゆきてみしはや
（元良親王・一二六）

では、人が梅花のもとを訪れている。しかし、一二五番歌の上句では、「木づたふ」ことで「移り香」を身にまとうのは鶯であろう。従ってその移り香によって「にほふ」袖は、鶯が訪れた相手の袖と解釈した。香には関わらない歌ではあるが、

鶯の心もしらで桜花けさあだびとの袖にむつるる
（高遠・八七）

には、鶯＝男性、花＝女性、のイメージが重ねられている。或いは、梅花を訪ね求める人と、男性に重ねられた鶯と、そのイメージの重層化をねらう歌だろうか。

また一二六番歌のように、鶯が花の散るのを惜しんで鳴くという歌は、『古今集』等少なくないが、鶯が「幾世」もの春を鳴いて過ごしている姿は、人が花を惜しむ姿と容易に重なる。また、「幾世の春」には、祝意を読み取ることも可能であろう。

一二七・一二八番

郭公

郭公（ほとゝぎす）一声にこそ五月雨（さみだれ）の夜はあはれともおもひそめしか

郭公ねこそなかるれ菖蒲草玉（あやめぐさたま）にぬくれど今日（けふ）はしらずや

［異同］なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］なし

［語釈］○一声にこそ　底本「にこ」は虫損。御所本により補う。○ねこそなかるれ　自然と声をあげて泣いてしまう、の意。「ね」は「音」と「根」、「なかるれ」は「泣かるれ」と「流るれ」の掛詞で、「根」「流る」はともに菖蒲草の縁語。「いつかとも思はぬ沢の菖蒲草ただつくづくとねこそなかるれ（拾遺・恋二・七六七　よみ人しらず）」を踏まえるか。

［通釈］郭公

郭公のただ一声のために、五月雨の夜はしみじみ趣深いと思い初めたことだよ。
（一二七）

郭公よ、私は声に出して泣いてしまうことだ。菖蒲草を玉に抜く日だけれど、お前は今日を知らないのだろうか、訪ね来てくれないことだ。

（一二八）

［補説］　一二三番以下四首と同じ「鶯郭公優劣定め」の折に、郭公賛美として詠まれたものかと思われる二首。鶯が春の進行と併せて讃えられたように、こちらも五月雨、五月五日とからめて詠まれている。ただし一二八番歌は必ずしも郭公賛美になっていないようにも思われる。

一二八番歌は、

霍公鳥（ほととぎす）　雖待不来喧（まてどきなかず）　菖蒲草（あやめぐさ）　玉尓貫日乎（たまにぬくひを）　未遠美香（いまだとほみか）

（万葉・巻八・一四九〇）

郭公今日とやしらぬ菖蒲草ねにあらはれてなきも来ぬかな

（躬恒・二六九）

等の先行歌を下敷きに、郭公を待つ心を詠んだものと考えられる。『古今集』の時代と異なり、郭公の声を待ち聴くことが盛んに詠まれるようになった結果、思い通りに来て鳴いてくれない郭公を恨むような気持ちが生じ、それを端午の節句の風情とともに詠んだものなのであろう。

稲賀敬二氏は、一二三～一二七の一連の歌を、次の『朝光集』三五・三六番歌と同時のものと見ておられる（『女流歌人　中務―歌で伝記を辿る―』。以下『女流歌人中務』と略称）。

四条の宮、内の大盤所に、これさだめてとの給へるに

鶯の春の初音と郭公夜ぶかく鳴くといづれまされり

とあるを、人人さだめさせ給ふ

折からにいづれもまさる鳥の音を時ならぬ身はいかが定めん

従うべき見解であろう。但し、この「鶯と郭公の優劣定め」を、「「四条宮、内の台盤所」で行われた」として、頼忠邸が里内裏だった天元四（九八一）年秋（七月七日～九月十三日）の事としている点には、従えない部分がある。なぜなら、『朝光集』の詞書は、「四条の宮」を「の給へる」の主語と読むべきであろうし、朝光の歌に「折からに」とあることからは、「人々さだめさせ給ふ」のことがあったのは、鶯か郭公の、どちらかの季節である可能性も読み取れるからである。すなわち、『朝光集』からわかるのは、四条宮（遵子）の入内後に、内裏の台盤所でこの「優劣定め」が行われたということと、これに加えるなら、季節は春か夏ではないかということである。これに『中務集』当該箇所の詞書「円融院の御時」とを重ねて考えるならば、円融天皇の譲位が永観二（九八四）年八月であるから、一連の歌の詠作時期は、天元元（九七八）年四月以降、永観二年八月以前とするのが穏当である。朝光が「時ならぬ身」と身の不遇を言うのは、父の兼通の死後（兼通は貞元二（九七七）年三月に死去）のことと考えられ、遵子入内後の天元年間以降の状況にもかなっている。兼通の愛息子であった朝光は、父の死の前年、貞元元年正月に二七歳で従二位権大納言、同十二月には左大将をも兼ねるほどであったが、父を失った後は、官位があまり進まず、長徳元（九九五）年正月に正二位按察使大納言で没している。

では、次の『能宣集（西本願寺本）』四三一～四三三番の歌は、どうであろうか。稲賀氏はこの『能宣集』については言及していない。

殿上人、女房かたわきて、鶯、郭公おとりまさると云ふ事を定むに、女方鶯をまさるといひて、その心をよめとませば、女方

にかたらひて

鶯のはかぜに花はちりにけり垣根がくれに郭公なけ

また

しののめにかたちなみせそ郭公夜半のこゑはきつつなくとも

又

郭公夜半のねきけど鶯の花にむつれし声ぞ恋ひしき

詞書や歌の内容から判断して、これも同時の可能性が高い。こちらの詞書で注目されるのは、「女方鶯をまさるといひて、その心をよめとませば」である。女房たちが鶯を優るとして、能宣に、鶯がすぐれているという内容の歌を求めたのである。これは、中務がこの「優劣定め」に歌を召されて、郭公の歌が二首であるのに対して、鶯を賛美する歌は四首も詠んでいることの事情を示唆するように思われる。また、中務の郭公詠の二首め（一二八番）が必ずしも郭公賛美ではないことも、能宣の歌と内容が符合していると言えよう。『朝光集』三五、三六番によれば、この「優劣定め」を言い出したのは中宮遵子であるようだ。これに円融天皇が反応し、殿上人が主として郭公方、女房は多く鶯方に立つような形で優劣定めが行われたものか、と考えると、中務・朝光・能宣の三人の集の内容が繋がる。すなわち『朝光集』三六番詞書の「さだめさせ給ふ」の主語は天皇で、「人人さだめさせ給ふ」には恐らく誤写や脱字があり、「人々してさだめさせ給ふ」の意であったのではないか。そのように読むと、朝光の三六番歌が『拾遺集』に採録された際、「円融院のうへ、鶯と郭公といづれかまさると申せ、とおほせられければ（拾遺・雑下、五一二番詞書）」と書かれたことも理解されるし、当該『中務集』で「円融院御時に鶯郭公いづれまされりと競べさせ給しに、仰せ事にて召しし」と説明されていることも同様に理解される。

一二九番歌

堀河中宮の掩韻のところに召ししかば

夏山のしげきを分くるさを鹿をいかでともしの人たづぬらん

[異同] 堀川中宮→ほりかはの中納言（西・前）ほりかはの中宮（歌）、ゐふたき→ゐんふたき（前）、めし、かは→めしたりけるに（西）めしたりけるころ（前）ナシ（歌）、なつやま→山、（西）おくやま（前）、しけきをわくる→しけりをわけて（西）、さをしかを→なくしかを（西・前・歌）、ともしの→とものゝ（歌）

[他出] なし

[語釈] ○堀河中宮　円融天皇妃媓子。天暦元（九四七）年生。父は藤原兼通。天延元（九七三）年二月に入内し、四月に女御、七月には皇后となるも、皇子女に恵まれなかった。天元二（九七九）年に三三歳で薨去。底本では掩韻は媓子主催とあるが、西本願寺本、前田家本では堀河の中納言、すなわち藤原兼通主催とされている。この異同についての私見は［補説］。○掩韻　文学遊戯の一種。古詩の韻字を隠しておき、それを互いに当てて勝敗を決する。言い当てた字を「明（あけ）」という。○さをしかを　底本「さをしかも」だが、他本により改めた。○ともしの人　「照射（ともし）」とは、闇夜に松脂を小さなかがりに燃やして鹿を追い、鹿の目が火影に反射して輝くのを的に射る鹿猟の一手法。火影を牝鹿の目に擬して妻恋う牡鹿を射るとも。「ともしの人」とは「ともしをする人」の意と思われるが、他例が見出し難い。

[通釈] 堀河中宮が掩韻をなさるところにお召しがあったので

夏山の枝葉が茂った木々を分けて行く牡鹿を、いったいどのようにして照射する人々はたずねるのでしょうか。

［補説］［語釈］に記したように、この掩韻の主催者は、底本・御所本の詞書では堀河中宮煌子、西本願寺・前田家本の詞書では、その父・堀河中納言兼通とされる。しかしこれは、主催者を父娘のどちらと取り、記載したかという問題で、堀河中宮のもとで行われた掩韻を兼通が取り仕切ったという意味では同じことだろう。兼通の兄・伊尹の妻は、中務の娘・井殿。こうしたつながりによって中務の歌が召されたのだろうか。

また、「草木が生い茂る夏山で、人々はどのように鹿を探し当てるのか」とする当歌は、おそらく、多くの文字の中から一つの韻（明（あけ））を探し求める掩韻に事寄せて詠まれたものと思われる。

一三〇番歌

七月七日、一品宮の皇女の負業の扇の料に

天の河河辺涼しき七夕に扇の風をなをや貸さまし

［異同］一品宮の→のナシ（西）、まけわさあふきのれうに→まけもの、れうとうの少将たてまつるあしてのぬひものして（西）まけもの、れう中将たてまつるあしてのぬひものに（前）まけ物とうの中将のたてまつるあしてに（歌）

［他出］拾遺・秋雑・一〇八八、円融院扇合十二、和漢朗詠二〇一、三十人集一二七、三十六人集一五〇、深窓秘三七、撰集抄七一

［語釈］○一品宮の皇女　村上天皇皇女・資子内親王。母は皇后藤原安子。天禄三（九七二）年三月昭陽舎において藤花の宴を催した折、一品に叙され、三宮に准ぜられた。○負業　歌合、碁、相撲、弓といった勝負事で、負け方が勝ち方に対して行うもてなし。贈り物の場合と馳走などの場合とがある。

［通釈］七月七日、一品宮の皇女が負業として奉られる扇の料に

天河の河辺も涼しい今日七夕の日に、更に織女に扇の風をお貸ししたものでしょうか。

［補説］当該歌は、他出である『拾遺集』一〇八八番歌の詞書に、「天禄四年五月廿一日、円融院の帝一品宮に渡らせ給ひて、乱碁とらせ給ひける負業を、七月七日にかの宮より、内の台盤所に奉られける扇に貼られて侍りける薄物に、織りつけて侍りける」とあり、円融院と一品宮資子が催した乱碁の負業として奉られた扇に付されたものと考えられる。

この時の扇に付された歌は、まとめて「円融院扇合」という名称で伝わっているが、これ自体は扇合の記録ではない。同時詠としては他に、「天河扇の風に霧はれて空すみわたる鵲の橋（元輔・七三）」、「天つ風あふぐともゆめ霧立つなこは七夕の織れる錦ぞ（新続古今・秋上・三八二藤原為光）」などがある。

円融院扇合十二番歌（当該歌の他出）の詞書は、奉られた扇について、「白銀の沈の型に彩りて、二藍の裾濃なる薄物重ねて、真名仮名にて織りつけたり。糸遊上に重ねたり」と、その詳細を記している。また、西本願寺本、前田家本の詞書には、歌が葦手で縫い付けられていたこと、中将・藤原為光によって奉られたことが語られる。

一三一番歌

春宮の殿上人の扇奉りたるに

こよなくぞ今朝は涼しき袂よりあふぐ風さへ秋になりつつ

［通釈］ 春宮に仕える殿上人が、扇を奉るのに格段に今朝は涼しくなったことです。袂からあおぐ風までも、次第に秋のように涼しくなって。

一三二番歌

村上御時菊合に、洲濱に鶴菊あり。左方、

鶴の住む汀の菊は白浪のをれどつきせぬ影ぞ見えける

［異同］ 村上御時→村上のみかとの御時の（西）むらかみせんわうの御ときの（前）村上のてんわうの御時に（歌）、濱→すはま（西・前・歌）、鶴あり→つるきくあり（西・前・歌）、左方→ナシ（西・前・歌）、すむ→ゐる（前）、きくは→きくに（前）、おれと→をれと（西・前・歌）、かけ→色（歌）

［他出］ 夫木・秋五・五八九八、古今著聞三三三、玉葉・秋下・七七九

［語釈］ ○村上御時菊合　天暦七年十月廿八日内裏歌合。この月は五日にまず紫宸殿の残菊の宴が催され、十三日に庚申の遊び、そして二十八日に内裏菊合が行われた。十巻本、廿巻本類聚歌合に、「州浜に植ゑたる歌」として「千年ふる霜の鶴をばおきながら菊の花こそひさしかりけれ（作者・なだ、左方）」と、当該歌が右方の歌として記されている。また、当日の様子は藤原師輔の日記『九条殿記』『古今著聞集』に詳述されており、師輔・高明・師氏（左方）や、顕忠・師尹（右方）らが参加していたと分かる。萩谷朴氏（『平安朝歌合大成』（以下『歌合大成』）の当該歌合解説）は、『元輔集』五番「たとふべき色もなきかな菊の花枝をわきてや露もおくらむ」は、他の菊合の歌である可能性もあるが、おそらく本歌合の為に寄せられ、撰に洩れた歌の一首に該当するものではないかと推察されている。○洲濱に鶴菊あり　底本「濱に鶴あり」だが、歌合の場では「洲濱」とするのが妥当であろうこと、「鶴菊」とした方が、より歌の内容に合致するという判断のもと、他本によって改めた。○左方　底本によれば、当該歌は左方から詠進されたことになっているが、前述したように十巻本、廿巻本類聚歌合では、右方となっている。「左」、「右」は誤写されやすく、本来「右」であったものが、伝写過程で「左」となってしまったか。○白浪のをれど　底本「おれど」だが、歴史的仮名遣いを考慮し、他本により「をれど」と改めた。「をる」は、「浪をる」の意と「花を折る」の意を掛ける。この掛詞の同時代作例としては、「手もふれで惜しむかひなく藤の花そこにうつれば浪ぞをりける（拾遺・夏・八七　躬恒）」、「水底にかげをうつせば菊の花しのびしのびに浪やをるらむ（高遠七八）」などが挙げられる。○つきせぬ影ぞ見えける　白浪が折っても白菊の美しい姿は尽きることがないという表現は、造り物である洲濱の景ならではの表現だが、「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか（古今・秋下・二七二　菅原道真）」のように、浪しぶきを白菊に見立てる表現も意識され、「白菊が折られても、花と見紛う浪しぶきが立っている」という意も含まれているだろう。

［通釈］　村上御時の菊合に、洲濱に鶴菊がある。左方、

鶴の住んでいる汀に咲く菊は、白浪が寄せ返し、折っても尽きることのない真っ白な姿がみえることだ。

一三三番歌

同じ御時、紅梅植ゑさせ給ひて、鶯の巣など作らせ給て、召して、

鶯のうつれる枝の梅の花香をしるべにて人はとはなむ

［通釈］　同じ御時に、紅梅を植えさせなさって、鶯の巣など作らせなさり、お召しになって、

鶯が移り住んだ枝に咲く梅の花を、香りを標にして、人は訪ねてほしいものだ。

一三四番歌

四条宮の女御と聞こえし時、瞿麦合せさせ給ひしに、四つ

葦鶴のをれる浜辺のなでしこは千代をや色と日々に染むらん

［異同］　（※前田家本は当該歌を収載していない）四条宮の女御→三条の女御（西）三条女御（歌）、ときこえし→ナシ（西・歌）、なてしこあはせゝさせ給ひしに→なてしこあはせし給に（西・歌）、いろと→いろも（西）、ひゝにそむらん→ひきはそふらん（西）ひには染らん（歌）

［他出］　なし

［語釈］　○四条宮の女御　［補説1］参照。　○瞿麦合　右方と左方からなでしこの花を出して優劣を競い、歌合をすること。一三四番から一三七番までの四首中、当該歌以外は「天暦十年五月廿九日宣耀殿女御瞿麦合」にあり、当該歌も含めた四首は同歌合の詠進歌。○宣耀殿女御瞿麦合　天暦十年五月二九日宣耀殿女御（当時御息所）藤原芳子の方で催された瞿麦合。瞿麦の洲浜に、左が中務、右が兼盛の歌各三首を添え、瞿麦合の次にその歌の優劣を競った。現存最古の瞿麦合で、勝負の重点はすでに物合よりも歌合に移行している。歌合の本文は［補説2］に挙げた。○葦鶴　葦の生い茂っている水辺にいる鶴。『万葉集』以来の歌語。当該歌では「鶴」と「千代」で祝意を表す。当該歌の「葦鶴のをれる浜辺のなでしこ」は、なでしこを植えて鶴などを置いた洲濱の様子。

［通釈］　四条宮が女御と申し上げた頃、瞿麦合をなさった時に四首

鶴がいる浜辺のなでしこは、千代を色として、日に日に美しく色を染めあげているのだろうか。

［補説1］　当該歌以下の四首は宣耀殿女御瞿麦合の詠進歌である。宣耀殿女御は小一条大臣藤原師尹女芳子。底本の詞書は「四条宮の女御」、西本願寺本・歌仙家集本は「三条の女御」であるが、「小一条」でなければ芳子ではない。『歌合大成』は「三条女御」については「こ一条」を「三条」と誤ったかと指摘する。「四条宮」については不明だが校訂もしがたいため本文はそのままとした。

芳子は村上天皇女御。昌平・永平両親王の母。入内は師尹の左衛門督就任（天暦七（九五三）九月）以後、天暦十年の同歌合以前とみられる。天徳二年（九五八）十月二十八日に女御となる。康保四年（九六七）七月二十九日薨。

［補説2］　『歌合大成』より、歌合本文を載せた。歌番号は同書による。一番から五番までは十巻本・廿巻本ともに収載し、六番は十巻本のみ、

七番から九番は廿巻本のみの収載歌である。本文は一番から六番は十巻本、七番から九番は廿巻本による。歌の異同のみ本文の右側に付した。

天暦十年五月廿九日左衛門督の御息所の御方の御達の瞿麦合の歌左中務君、右兼盛

左　中務

一　なでしこの花の影みる河浪はいづれのかたに心よすらむ

右　兼盛

二　百敷にしめゆひそむるなでしこの花とし見れば濃さぞまされる

左　中務

三　あしひきのやまとなでしこ色深き今日きや恋ふてふ人を待たまし

右

四　水底に影さへみゆるなでしこの浪の花をや色に染むらむ

左

五　田鶴のすむ浜辺に匂ふとこなつはいとどのどけき影ぞみえける

右

六　山賤の垣穂ながらに移し植ゑていつとなくみむとこなつの花

この歌の洲浜を又の日、若宮に奉り給ひけるに、色紙に書きて洲浜に書きたりける歌。

七　なでしこの花咲きそむる夏の野に今日ひぐらしの声かきこゆる

宮の御返し

八　蜩のなくもことわりなでしこのかひある夏の野べとみゆれば

又清涼殿御返し

九　宮城野に今日さきそむるなでしこはならはぬ色に人やみるらむ

一三五番歌

垣ほなる大和なでしこ色深き今日や恋ふてふ人をまたまし

[異同]　詞書→三条の女御なてしこあはせに（前）、けふやこてふ→けふやこふ〳〵（西）けふやへといふ（前）けふやこふてふ（歌）

[他出]　宣耀殿女御瞿麦合三

[語釈]　○恋ふてふ　底本では「こてふ」とあり、この後に一字空白がある。宣耀殿女御瞿麦合（十巻本）や、歌仙家集本に「こふてふ」の本文があるため、それらに従って本文を「恋ふてふ」と改めた。詳しくは[補説]参照。「恋ふてふ」は「恋ふ」と「請ふ」の掛詞。恋しいといって請う、の意。用例は非常に少なく、中務以前では、「みちにあひてゑみせしからにふるゆきのきえばけぬがにこふてふわぎもこ（古今和歌六帖・五・二八九二　あめのみかど）」のみ。これ以外は時代が下って『草根集』六九九九番・八〇六六番、『雪玉集』五〇一七番、『漫吟集』一七〇六番の数例がある。

[通釈]

垣の大和なでしこの色が深い今日、そのなでしこを恋しいと言って、請うてやって来る人を待とうかしら。

[補説]　当該歌第四句は、[語釈]で述べた通り底本は「こてふ」の後に一字空白の本文である。ここは諸本の間で本文に揺れがあるが、底本はひとまず「こてふ」と理解して、意識的に一字空白としたか。

「こてふ」を用いた歌の用例としては次のようなものがある。

又はうぢのたまひめ

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふにににたりまたずしもあらず
（古今・恋四・六九二　よみ人しらず）

題しらず

こてふにもにたる物かな花すすきこひしき人に見すべかりけり
（拾遺・雑秋・一一〇三　貫之）

はなのえだに、ふみのあるをみて

春のとふ心つかひをたづぬればはなのたよりにこてふなりけり
（仲文・八）

このように「こてふ」は「来いという」の意で相手を招く表現である。当該歌を「こてふ」の本文で理解すると、「垣のなでしこの色が深い今日、いらっしゃいと招く人を待つことにしようか」と、女性からの招きを待つ男性の歌のように解釈できる。しかし「人を待つ」というのは一般的に女性の行為である。ここでは「人をまたまし」とのつながりを考えて「恋ふてふ」と校訂した。

一三六番歌

なでしこの花の影見（かげみ）る川波（かはなみ）はいづれのかたに心寄（こころよ）すらん

［異同］花のかけみる→はなのかけする（前）花の色する（歌）

［他出］宣耀殿女御瞿麦合一

［語釈］○川波　当該歌ではなでしこの花に女性を、川波に男性を連想させる。○心寄すらん　好意を寄せる意。「寄す」に波が寄せる意を重ねる。同趣の歌に朱雀院の女郎花合の際に詠まれた「をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらん（古今集・秋上・二三〇　貫之）」がある。

［通釈］

水辺に咲くなでしこの姿を見る川波は、どちらのなでしこに心を寄せて波を打ち寄せるのだろうか。

一三七番歌

なでしこの花咲（はなさき）きそむる夏の野に今日（けふ）ひぐらしの声（こゑか）ぞ聞こゆる

［異同］夏の野に→あきの丶に（西・前）、こゑかきこゆる→こゑのきこゆる（西）こゑそきこゆる（前）

［他出］宣耀殿女御瞿麦合七（廿巻本）、夫木和歌抄三四六一

［語釈］○花咲きそむる　なでしこの花が咲きはじめる、の意。若宮への意識がある表現。○ひぐらし　蝉の一種で梅雨の頃から初秋にかけ、朝にも夕方にも鳴くが、おもに秋の午後から日暮れ時、カナカナと高い金属音の哀調を帯びた声で鳴く。「ひぐらし」は「日暮らし」に「蜩」を掛ける。

［通釈］

なでしこの花が咲きはじめる夏の野に、その花を愛でて、今日一日中いるという、蜩の声が聞こえることだ。

［補説1］底本一三四番［補説1］に挙げた歌合本文七番の詞書から、当該歌は歌合の後、洲濱を若宮に奉る際に添えた歌であることがわかる。若宮は当寺七歳の皇太子憲平親王（冷泉天皇）と考えられる。憲平親王の母は藤原師輔女安子。芳子とは従姉妹関係である。

［補説2］当該歌第五句の異同について、底本と同じく「こゑか聞こゆ

る」の本文であるのは宣耀殿女御瞿麦合（廿巻本）、「こゑぞ聞こゆる」であるのは前田家本・夫木和歌抄である。底本に従えば、「なでしこの花が咲きはじめる夏の野に、今日一日中いるという、蜩の声が聞こえるでしょうか。」と疑問の意となる。しかし、歌合本文（廿巻本）によると、当該歌には次のような返歌がある。

宮の御返し

七　蜩のなくもことわりなでしこのかひある夏の野べとみゆれば

又清涼殿御返し

八　宮城野に今日咲き初むるなでしこはならはぬ色に人やみるらむ

［補説1］で述べたように、洲浜を奉った相手が憲平親王であると、七番はその生母安子の返歌、八番は村上天皇の御製である。当該歌を受けた七番が、「蜩のなくもことわり（蜩が鳴くのも当然）」と、蜩の声に重点を置いた表現であることから考えると、第五句は疑問の意である「こゑか聞こゆる」より、「声」指定して強調する「こゑぞ聞こゆる」の方が贈答歌としてもわかりやすい。

一三八番歌

孫の大納言の君、一条の摂政の女、歌合せしに、相如が、夜の梅にほふ香のしるべならずば梅の花暗部の山に折りやまどはまし

［異同］　むまこの大納言の君一条のせうさうの女歌あはせ、しにすけゆきか夜のむめ→みつあきらの少将哥合する夜梅（西）みつあきらの少将のもとにうたあわせするよむめ（前）みつあきらの少将のもとに哥合するに夜のむめ（歌）、くらふのやまに→くらふやまにも（西・前・歌）、やとりとはまし→をりまとはまし（西・歌）をりやまとはん（前）

［他出］　光昭少将家歌合一、歌枕名寄一二二六、夫木和歌抄六七六、女房三十六人歌合十四、風雅和歌集八二

［語釈］　○孫の大納言の君、一条の摂政の女、中務の孫娘。藤原伊尹女。母は井殿。光昭は同母の兄弟。相如室。○相如　内蔵頭右中将相信男。天延二（九七四）年六位蔵人、正五位下出雲守に至る。伊尹・道信・元輔・能宣らとも交流があった。長徳元（九九五）年に没。○暗部山　『古今集』以後によく詠まれる歌枕であるが、その場所は確定できない。和歌では「暗し」の意をもたせて詠んだり、「比ぶ」の意を掛けて詠まれることが多い。当該歌では「暗し」の意を持たせている。暗部山と梅を詠んだものでは「梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける（古今・春上・三九　貫之）」がある。○折りやまどはまし　底本は「やどりとはまし」。底本のままでも意味が通らないわけではないが、歌意が分かりにくい。西本願寺本により校訂した。花を折り惑うことを詠んだ歌には「あけぬともをりやまどはむ梅の花いづれともなき雪のふれれば」（躬恒集・三八四）などがある。

［通釈］

孫の大納言の君、一条の摂政の娘が歌合をした時に、相如の方から、夜の梅

匂ってくる香りの案内がないのなら、梅の花は暗い暗部山では折り惑ってしまうのかしら。

［補説1］　当該歌と一三九番は『歌合大成』に「（天元五年以前）右近少将光昭・中務歌合」として所収されている。主催者は光昭。梅・柳・桜の三題三番の歌合で、判はない。証本は十巻本と廿本とがあるが、後者は現在散佚して断簡一葉が存するのみ。

なお、光昭は藤原伊尹男。母は中務女井殿。中務の孫にあたる。生年未詳。貞元二年（九七七）十月二三日左近少将在任。天元五年（九八二）四月二日卒去。したがって、歌合が行われたのは天元五年以前の某春。次に十巻の本文を載せる。

中務がたれとしけるにかあらむ、夜のうちにあはせける。

梅　左　　中務

一　匂ふ香のしるべならずば梅の花倉部の山に折りまどはまし

右

二　色よりも香をこそ恋ひめ梅の花散るに匂ひはおくれやはする

柳　左　　中務

三　繰りかへす年経てみれど青柳の糸は旧りせぬ緑なりけり

右

四　池水に影うつしける青柳の糸をば波や分けてよるらむ

桜　左

五　ひとしきを待つとも歎く桜花咲かば名残のありしものゆゑ

右

六　桜花待たるることのひさしきを咲きなむ後のほどになさばや

［補説2］　当該歌を所収する光昭少将家歌合について、萩谷氏は「光昭を鍾愛する祖母の中務と二人、半ばは和歌習作の意味もこめて」行ったものであろうとし、峯岸義秋氏『歌合の研究　復刻版』（パルトス社一九九五）も同様である。

それに対して山口博氏は、御所本の詞書から「作者は光昭と中務ではなく、大納言君と相如である事がわかる。場所は光昭宅、判者は中務であろうか」（『王朝歌壇の研究冷村朝円泉上篇融』桜楓社　一九六七）とする。千葉義孝氏は「光昭と中務の二人のみが相対して、即席の和歌を詠じた」とするものの「なお、一説には作者を大納言君・相如とする。」と加えている（『和歌大事典』明治書院　一九八一）。

当該歌の詞書には大納言君と相如の名が見られるため、歌合を光昭と中務の二人だけで行ったとは断定し難い。また、底本の詞書では「相如が」の後に一字空白がある。ここにあえて空白を置くのは、「相如の歌」なのではなく「相如側の歌」ということを暗に含めているとも読み取れる。さらに中務の家集に収載されていることから、当該歌は相如の歌として中務が代詠した歌とも考えられよう。

歌合は、少なくとも中務・光昭・大納言君・相如によって行われたと思われる。

一三九番歌

青柳（あおやぎ）

くり返（かへ）す年経（とし）て見（み）れど□（あをやぎ）の糸（いと）はふりせぬ緑（みどり）なりけり

［異同］　あをやき→やなき（西）ナシ（前・歌）、みれ□→みれど（御・西・前・歌）、みとりなりけり→身とやなりなむ（西）物にそ有ける（歌）

［他出］　光昭少将家歌合三、風雅和歌集一〇四

［参考］　本家集の中で、六二番歌は当該歌と非常に類似した表現の歌である。

柳あり

くりかへし春はきぬれど青柳のいとはふりずもみゆる色かな

［語釈］　○底本の第二句は「としへてみれ□」と、本文が一字判読不可能となっている。御所本をはじめ諸本の「としへてみれど」に従って校

訂した。○青柳の糸　風に靡く細い枝を糸に見立てる。「よる」「かく」「乱る」「くる」「ほころぶ」「へ」といった糸の寄せになる語を駆使して詠むのが典型的な詠法。当該歌では「くり返す」「糸」「緑」が縁語。

［通釈］　青柳

繰り返す年を過ごして見るけれど、青柳の糸のような若枝は、古びることのない新鮮な緑色であったよ。

一四〇番

同じ孫の少将のちごのもとに、子日にあたりければ、一条右大臣へ籠物などしてたてまつる

春さむみ空の気色はつつめども今日の小松はなをぞ引きつる

［異同］　をしむまこのちこのもとに→おなし少将むすめのもゝかに（西）をなし少将むすめのいかに（前）おなし少将のむすめのもゝかのよ（歌）、子日にあたりけれは→子日にあたりたりけれは（西・前）子日にあたりてけるに（歌）、一条左大臣へ→一条の左大殿に（西）一条の大将に（前）一条の左大殿の（歌）、こもの→もの（西・前）、たてまつる→たてまつらるゝに（西・歌）たてまつるに（前）、春さむみ→はるさめに（西）、けしきは→けしきを（西）、こまつを→こまつは（前）

［他出］　なし

［語釈］　○同じ孫の少将　藤原光昭。○ちごのもとに　「ちご」は、西本願寺本等に「むすめ」とあるところから女子と見られる。「もとに」は、そのままでは「一条右大臣へ…奉る」とあるのと齟齬が生じる。西本願寺本・歌仙家集本に「もゝか（百日）」とあるので誤写の可能性が高いが、前田家本では「いか（五十日）」とするために、本文校訂がしにくく、ひとまず底本通りにしておく。但し「もとに」のままで解釈する場合には「ちご」が右大臣伊尹の邸宅にいたとでも考える必要が生じる。［補説］参照。○子日にあたりければ　「子日なりければ」でなく「子日にあたりければ」と言うところから、他本詞書のとおり、五十日か百日の祝いが子の日に当たった、の意と考えられる。○一条右大臣　底本は「左大臣」と読めるが、「右」「左」の誤写は少なくないので校訂した。藤原伊尹。右大臣師輔の嫡男、母は藤原盛子。同母弟妹に、兼通・兼家・安子などがいる。中務の娘の井殿との間に、大納言の君と光昭とがいたと見られる。天暦九（九五五）年、蔵人。天徳四（九六〇）年、参議。安和二（九六九）年、大納言となり右大将を兼ねる。天禄元（九七〇）年正月、右大臣、五月に実頼の薨去によって摂政。同二年、任太政大臣。天禄三年十月に病のため摂政を辞し、十一月一日薨去。諡は謙徳公。○籠物　果物などが籠に入ったもの。木の枝などにつけ、儀式のとき人に献上するのに用いた。「…同じむらごのくみして白金を桔梗をみなへしのえだにつくりてつけさせ給へり、白金こがねのこ物ただのもさまざまおほかり（円融院扇合）」○春寒み　春がまだ寒いので。「春寒み」は同時代には他に見られないが、「風寒み」「冬寒み」などはある。「風寒み春やまだこぬと思ふまに山の桜を雪かとぞみる（重之・八〇）」○つつめども　春らしさを隠しているけれども、の意か。また、中務自身が気兼ねする意なども響かせているか。［補説］参照。

［通釈］　同じ孫の少将の赤子のもとに、（祝いが）子の日に当たっていたので、一条の右大臣へ籠物などを仕立てて献上する

春まだ寒いので空の様子は春を隠しているけれども、今日の小松はやはり引いたことです（遠慮しつつも曾孫の祝いの日でもございま

すから献上致します）

［補説］「つつむ」の主語は歌の文脈では「空の景色」である。曇り空で雪などが舞うような寒い日であって、春らしい様子を見せないことを言うのであろう。それでもやはり引いたと歌われる「小松」は光昭の赤子、すなわち中務の曾孫のことを重ねて表現したものと思われる。そして、「つつむ」は、赤子の祖父にあたる伊尹に対して気兼ねや遠慮の気持ちがある意をも込めていると解した。

底本には、光昭に贈った歌（一八八番）や光昭の家での贈答歌（一九二・一九三番）があり、光昭は井殿や中務と同じ家に住んでいたのではないらしい。赤子の誕生の五十日乃至は百日の祝いも、光昭の家か赤子の生母の許で行われたのであろうが、中務も当然関わっていたであろう。一四〇番歌は、その祝いの日が子日に当たったので、祝いを催した報告を兼ねて籠物を仕立てて伊尹に献上した折の詠であろうか。もっとも、［語釈］に示したように、光昭や「ちご」が伊尹邸等にいたと考えるならば、底本通りでも解釈出来なくはない。

なお、中務と光昭に関係した資料としては、底本一七四～一七六番の円融院との贈答があり、同じ贈答が『円融院御集』冒頭部にも見える。

中務に、歌えりてまゐらすべきよし仰せられたりける、かきてまゐらせけるおくに書きたりける

今さらにおいのたもとに春日野のひとわらへなるわかなをぞつむ

これを、おくまでも御覧ぜでおかせ給てけるに、又のとし御覧じつけて、いとあはれなりける事をと、おどろかせ給て、むまごのみつあきらの少将を御使にて、つかはしける

春日野に多くの年はつみつれど老せぬものはわかななりけり

御返し

年のつむわかれは同じかほなれど今日にはにずやならむとすらん

「春日野に」の歌は、当該家集一七五番詞書によれば、「又の年の七日に、銀の籠に若菜などして」贈られている。一四〇番歌でも、同じ様な籠物が仕立てられたのであろう。

一四一～一四三番

冷泉院の女一宮御百日にたてまつらせ給ふ。州濱などして

なみ立ちてたづの影さへみゆるかな千世の数添ふしるしなるべし

水底に影をみせつつあしたづの君には千世もへだてざりけり

雲居にて君をみるべきたづなれば千歳もいとぞはるかなりける

［異同］冷泉院の→ナシ（西・前・歌）、御もゝか→御いか（西・前）御五日（歌）、たてまつらせ給すはまなとして→すはまなとしてたてまつれたまふに（西）すはまなとしてたてまつらせたまふに（前・歌）、なみたちて→なてたてゝ（西）なみたてて（前・歌）、ちよのかすそふ→ちとせかすまふ（前）、しるしなるへし→しるしなるらし（西）、みせつゝ→かけつゝ（西）、あしたつの→あしたつも（西）、きみにはちよも→きみにちとせを（西）きみにちとせは（前）、へたてさりけり→つたへたりける（西）、いとぞ→いとこそ（歌）、はるかなりける→はるけかりける（西）はるかなりけり（前）はるけかりけれ（歌）

［他出］秋風・賀・六五四（一四二番のみ）

［語釈］○冷泉院の女一宮　冷泉天皇第一皇女、宗子内親王。母は伊尹女懐子。同母弟妹に、花山天皇・尊子内親王がいる。○奉らせ給ふ　主語は伊尹か。木船注釈も伊尹の意を汲んで中務が歌を詠んだとする。中

宮安子はこの年の四月に亡くなっている。○なみ立ちて　西本願寺本「撫でたてて」、前田家本「なみ立てて」又は「なみ立てで」。木船注釈は「並み立ちて」とし、鶴が並び立つと解しているが、五十日祝の州濱の例歌からは、「なみ＝波」でも良いと思われる。一四二番のように「水底に影を見せ」る場合は波が立たないほうがよいが、波が「千世の数」と関わると見るならば、波は立ってよいことになろう。ここは「波立つ」と「並み立つ」の掛詞と解した。［補説］参照。○雲居　ここでは宮中の意をも響かせる。

［通釈］

冷泉院の女一の宮の御百日に献上させなさる。州濱などを造って

波が立ち、並んで立つ鶴の姿までも見えることだ。姫宮の御寿命に千世の数が添うことの表れであろう。　（一四一）

水底に姿を映し映しして葦にすむ鶴のように、あなた様には千世もさえぎるものがなく確かなことだ。　（一四二）

はるか雲居であなた様を見るはずの鶴であるから、千歳も大層遠い千歳なのだなあ。　（一四三）

［補説］　五十日・百日の祝の洲濱の歌としては次のような例がある。

当代の御五十日、すはまにかくべき歌めせば

波なごき浦に生ひいづる小松こそつぎつぎ君がちよはかぞへむ

（能宣・四八五）

あるみこたちの御五十日のすはまに

千歳すむ水の流れはいとどしく底のこずゑの数をさすかな

又

万代の波の間なくも寄するかな鶴と亀とのあそぶ浜辺に

（恵慶・一四九、一五〇）

能宣の歌では「波なごき」と波穏やかな浜の様が詠まれているが、恵慶の二首目では「万代の波の間なくも寄する」と、間断なく寄せる波が歌われている。これらの例から、「なみ立ちて」の「なみ」は「波」の意をも表すと考えた。洲濱と関わらない歌でも、祝賀の歌で波が立って打ち寄せる景を意識したものは少なくない。

延喜御時斎院屏風四帖、せんじによりて　つらゆき

幾世へし磯辺の松ぞ昔よりたちよる浪やかずはしるらん

（拾遺・雑賀、一一六九）

遙かなるほどに立ちまふ葦田鶴を我が前ちかく波は寄せなん

（伊勢・六八）

一四四番

山吹を折りて

のちに人恨（ひとうら）みもぞする蛙（かはず）なく井手（いで）の山吹（やまぶき）たれにつげまし

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　なし

［語釈］　○山吹　『万葉集』から詠まれる花。平安時代では「井手」「蛙」とともに詠まれることが多い。「色も香もなつかしきかな蛙なくゐでのわたりの山ぶきの花（小町・六二）」○恨みもぞする　恨みでもしたら困る、の意。「ふりぬとて思ひもすてじ唐衣よそへてあやな怨みもぞする（後撰・雑一、一一一四　雅正）」。

［通釈］　山吹を折って

後で人が恨んだら困ることだ。蛙が鳴く井手の山吹のことを、誰に

告げようかしら。

［補説］　山吹を一枝手折って、美しいこの花のことを誰に語るのが良かろうかと思う気持ちの歌であろう。詞書からは実体験を詠んだ歌のようにも思われるが、『忠見集』に次のような屏風歌等の例がある。

ゐでに山吹ある家あり、男まがきにたちよりてせうそく言はすをりてだにゆくべきものをよそにのみ見てや語らむゐでの山吹

かへし

よそにてもゐでの山吹みきといふな語らばほかに散りもこそすれ

（忠見・三〇、三一番）

東宮御八重山吹の宴に

ゐでにのみありときこえし山吹の九重ちかく咲きにけるかな

我をおもふ人ぞあるらしふるさとにゐでの山吹折りながら見つ

山吹を折るとはなしにゆふぐれのかはづなくまでたてる霞か

（忠見・一〇三～一〇五）

屏風歌の三〇番では山吹の花のことを語ろうかと言い、返歌三一番ではよそに知られては困るから語るなと言う。「散りもこそすれ」は「…もこそ」が使用されていて、「恨みもぞする」と歌う当該歌との類似がある。また、忠見の一〇三～六番歌は東宮による八重山吹の宴の時の歌と思われるが、宮中の山吹を詠んでも「ゐで」「かはづ」が詠まれており、三首中二首に「折りながら」「折るとはなしに」とある点がやはり当該歌と類似する。或いは当該歌も屏風歌詠進などの機会の作であろうか。

一四五・一四六番歌

短き桔梗を根ごめに引きて、女三宮より

露しげき浅茅が原の花なれば短きほどに秋を知るかな

御返事に

浅茅生の下に咲きける花の色を虫の音ごめにいかで引きけん

［異同］　結梗→き経（西）くき（前）、ねこめに→にナシ（西）ねなから（前）、女三宮より→ナシ（前）、□□→はな（御・西）、ゝれと→ゝれは（西）みれは（前）、御返事に→御返しに（御）御かへし（西）にナシ（前）、むしのねこめに→むしのねことに（西）むしたにことに（前）、いかてひきけん→たれかひきけむ（西）、たつねさりけり（前）

［他出］　なし

［語釈］　○桔梗　底本「結梗」とあるが、他本によって校訂。○女三宮　冷泉天皇皇女・光子内親王、もしくは村上天皇皇女・保子内親王。詳しくは［補説］。○花なれば　底本では、「花」の部分が欠損しており、判読が困難である。よって他本により補った。また、底本は「なれど」と、逆接表現であるが、歌の内容的には順接であってほしいところ。よって西本願寺本により「なれば」と改めた。○短きほど　木船注釈では、「短き」は「身近き」との掛詞とするが、「みじかき」と「みぢか」とを、音通として掛詞としたか否か、検討の余地があると思われる。また、「短きほど」という表現は他例がなく、どう解釈するべきか、判然としない。「瞬く間に秋の到来を知った」、もしくは「秋の期間の短さを知った」な

どとするのが妥当だろうか。ここではひとまず「ほんの短い間に」と取り、通釈した。○秋を知るかな　桔梗の花を見て秋の訪れを詠む発想は、「秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく（古今・物名・四四〇　紀友則）」の影響を受けたものか。○虫の音ごめ　「根ごめ」と「音ごめ」の掛詞。この掛詞例は他例を見出し難い。

［通釈］　短い桔梗を根ごと引いて、女三宮から

露がたくさん置いた浅茅原の花ではあるが、その丈の短さの如く、ほんの短い間に秋が来たと知ったことです。

御返事に

浅茅生の下に咲いている花の美しい色を、虫の音まで込めて、一体どの様にお引きになったのでしょうか。

［補説］　一四五番歌詞書の「女三宮」、すなわち中務に歌を詠み贈った主は、従来、冷泉天皇皇女・光子内親王と考えられてきた。しかし、光子内親王は天延元（九七三）年に生まれ、翌年二歳で内親王となるも、天延三年六月に、わずか三歳で薨去している。当該歌を内親王自身ではなく、宮付きの女房など、周辺人物が贈ったと考えることはできるだろうが、別の可能性を探ってみることも必要だろう。

中務存命中に、「女三宮」と称された人物として、他に村上天皇皇女・保子内親王が挙げられる。保子内親王は、天暦三（九四九）年に生まれ、応和二（九六二）年着裳。三十代後半に至り、藤原兼家に降嫁するが、結婚生活は長く続かず、一年程後には薨去している（永延元（九八四）年八月）。つまり保子は、降嫁以前、三十数年という長期間「女三宮」と称されていたのであり、その期間は大方中務の壮年期と重なる。よって、この「女三宮」は保子を指す可能性が高いのではないだろうか。

一四七・一四八番歌

御屏風の歌、内裏に詠みて奉りしを見給て、右大将

吉野山瀧の糸さへとぢたれど早く知りにし声は忘れず

返し

岩浪は高かりしかど吉野山通はで凍る冬ぞへにける

［異同］　なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］　一条摂政六七、六八

［語釈］　○御屏風の歌内裏に詠み奉りしを　底本六〇～六八番歌、「朱雀院の若宮の御裳着の屏風」に詠進した歌を指す。当該歌は底本六八番歌「瀧の糸はみなとぢつらん吉野山雪の高さに音を変へつつ」を見て詠まれたもの。○右大将　藤原伊尹。伊尹については一四〇番歌［語釈］を参照のこと。○とぢたれど　「とづ」は、「水が凍る」の意。当該贈答では、瀧水が凍ることを、男女の行き来が滞ることの暗喩としている。

［通釈］　御屏風の歌を内裏に詠み奉ったのを御覧になって、右大将から

吉野山の瀧の流れの白糸さえ凍ってしまい、水の音を聞くことはできませんが、早くに聞き知ったその音を忘れはしません（あなたとの仲は途絶えてしまいましたが、私は早くに知ったあなたのお声を忘れてはいませんよ）。

返し

吉野山の巌を越す浪は高かったものですが、その水も通い流れることなく凍ってしまう冬を経たことです（かつては熱心に通って下さ

いましたが、その訪れも滞って久しくなりましたね）。

［補説］ 他出である『一条摂政御集』六七番歌の詞書は「とねぎみの母君は、ゐどの、中務のむすめ」となっている。稲賀敬二氏（『女流歌人中務』）は、「とねぎみ」とは、「光昭君」の草仮名を読み違えたのではないかと推測されている。確かに、「光」と「登」を字母とする「と」、「昭」と「祢」を字母とする「ね」は字形が近く、稲賀氏の推測は穏当と思われる。

また、この贈答は、吉野の瀧の凍結を、男女の行き来の滞りに喩え、男はそれでも猶愛情が続いていると詠い、女は夜離れを嘆く内容になっている。詠みぶりからして、夫婦である伊尹と井殿の間に何かしらの不和があり、関係が途切れているところに、中務の若宮御裳着屏風歌をきっかけとして伊尹がご機嫌伺いの歌を詠み、井殿の立場で中務が返歌を代作したか、などと想像される。

一四九番歌

五月に人のもてきたる松を楓の木のもとに植ゑて

思ふより小高き松の葉にしあれば千代も楓とともにこそ見め

［通釈］ 五月に人が持ってきた松を楓の木の根元に植えて

思ったよりも小高く茂っている松の葉ですので、千代も葉の色を変えない姿を、楓と共に見ましょう。

一五〇番

年の晦日の、鶯のなくを

いづこをか春ならずとはわきて見ん雪散る枝のうぐひすの声

［異同］ なし（底本・御所本のみの所収歌）

［他出］ なし

［語釈］ ○年の晦日の 「晦日の」の「の」は、「に」の誤写か。あるいは、「年の晦日の日」とあるべきところ「日」を脱したとも考えられる。○いづこをか 「いづこ」は、どこの意。「か」は、反語と見る。「春霞たてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ（古今・春上・三よみ人しらず）」。○わきて見ん 「春ではない」と区別して見ることができるところは、どこにもない意。○雪散る 「雪」については「降る」を用いるのが一般的で、「散る」は「花」について用いる言葉である。ここでは「雪」に「散る」を用いることにより、雪が降るさまを花が散るさまに見ていることを表現している［補説］参照。

［通釈］ 年の暮れに、鶯が鳴くのを

どこを「春ではない」と区別して見ることができようか。雪が花のように散る枝の鶯の声を聞くと。

［補説］ 年の暮れに鶯の声を聞いた感慨を詠んだ歌。鶯は春を告げる鳥と認識されていた。その鶯がとまっている枝には雪が降っているが、その雪は花が散るさまに見え、まるで春景色を先どるようである。花が咲き鶯が鳴いているので、暦の上では冬だけれども春を否定する要素はどこにもないと詠んでいるのである。

当該歌のように、雪が降るさまを花が散るさまに見立てた歌は中務以前にも、

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なきさとも花ぞちりける
（古今・春上・九　貫之）

春立ちて猶ふる雪は梅の花さくほどもなくちるかとぞ見る
（拾遺・春・八　躬恒）

など多く見られるが、当該歌では「花」という言葉を詠み込まずに「雪散る」だけで雪を花と見ていることを表わしている。中務には雪が降ることを「散る」と表わした例がもう一例ある。

十二月の庚申に、鶯なく

ちりまがふ雪をはなにてうぐひすは春よりさきになくにやあるらん
（底本・一一四）

ただし、この歌には「はな」が詠み込まれている。また、中務と同時代には次のような歌もある。

しも月にさきたるむめを、人のたてまつれりければ

ふゆごもりゆきちるさとにおもなれてほころぶ花もしらずぞありける
（斎宮女御・二四七）

右の歌でも「雪散る」と表現したのは「ほころぶ花」に関連させたものと見られる。当該歌のように、「花」という言葉を全く詠み込まずに「雪散る」だけで雪を花と見ていることを表した例は珍しい。

一五一番

竹の中に

春立ちて竹になくなるうぐひすはいかなる節をしのばざるらん

［通釈］竹の中に

春になって、竹の中で鳴く声が聞こえる鶯は、いったいどのようなことをこらえきれずに鳴いているのだろうか。

一五二番

月を

山の端は池の底にも見えなん入るとも月の隠れざるべく

［異同］月を→ナシ（西・前・歌）、そこ→そら（歌）、見えなゝん→みなゝん（前）、かくれさるへく→かくれさるへし（歌）

［他出］なし

［語釈］○山の端　山の稜線に近い部分をさす。月が出たり入ったりする場所として詠まれることが多い。「あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ（古今・雑上・八八四　業平）」。○池の底　水に映る影は水の底にある、と詠まれることが多かった。「ひともとと思ひしきくをおほさはの池のそこにもたれかうゑけむ（古今・秋下・二七五　友則）」「藤浪のかげしうつれば我がやどの池の底にも花ぞ咲ける（貫之・五〇六）」。○見えなん　見えてほしい意。「ゆふぐ

れのまがきは山と見えななむよるはこえじとやどりとるべく（古今・離別歌・三九二　僧正遍昭）」。○入る　月が山の端に沈むことを「入る」という。「あづさゆみはるかに見ゆる山のはをいかでか月のさして入るらん（拾遺・雑下・五三三　能宣）」。また、水の底に沈むことも「入る」という。「わたつみのそこのありかはしりながらかづきていらん浪のまぞなき（後撰・恋二・六五五　藤原兼茂）」。次の例は池に映る月を池の底に入ったと詠んだ歌。「ふゆの池のうへは氷にとぢられていかでか月のそこに入るらん（拾遺・冬・二四一　よみ人しらず）」。

［通釈］　月を

山の端は池の底にも見えてくれたらなあ。たとえ「入る」としても月が隠れることがないように。

［補説］　木船注釈では、当該歌について「池の底に見える山は、映っているのではなく、裏返って倒れ込んでいると想定し、月が山の端の向こうに入っても、池の底には見えつづけるはず、という機知。明月を愛惜するゆえの、あらぬ望み。」と解釈しているが、理解しにくい解釈のように思う。「裏返って倒れ込んでいる」とは、山の向こう側のことを示しているのであろう。「あかずして月のかくるる山本はあなたおもてぞこひしかりける（古今・雑歌上・八八三　よみ人しらず）」や、「おそくいづる月にもあるかな葦引きの山のあなたもをしむべらなり（同・八七七　よみ人しらず）」など、山の向こう側の月に思いを馳せた歌が決して珍しいわけではない。しかし、当該歌の表現から、山の向こう側に月が入った後も池に月が見え続けると解することは、無理があるように思う。

中務よりも後代に詠まれた歌であるが、『後拾遺集』に当該歌と非常によく似た歌があり、当該歌を解釈するうえで参考になる。

麗景殿女御家歌合に　　堀川右大臣

山のはのかからましかばいけ水にいれども月はかくれざりけり

（雑一・八四三）

「山の端が池のようであったらよいのに、池に入っても月は隠れることがないから。」といった意味になろう。藤本一恵氏が「まことに稚戯に類する趣向」（『後拾遺和歌集全訳注』講談社学術文庫）と指摘されているように、「山の端が池のようになればよい」という非現実的な願望によって月を愛惜する思いを詠んでいるのである。当該歌も、この後拾遺集歌と同じ趣向なのではないだろうか。［語釈］に示したように、山の端に沈むことも、水の底に沈むことも「入る」と言う。山の端に「入る」月は見えなくなるが、池の底に「入る」月は見える、だから「山の端が池の底のように見えてくれたらなあ」と、沈む月を惜しむ気持を詠んだのであろう。

一五三番

花を

今はとて散りゆく花のわりなさは露のおくにもとまらざりけり

［通釈］　花を

「今は、もうこれまで」と去るように散ってゆく花のどうにもならないところは、露が置くにもかかわらず、とどまらないことであったよ。

一五四番

女郎花を

長き夜(ながよ)をいかにあかして女郎花朝顔見(をみなへしあさがほみ)れば露(つゆ)けかるらん

〔通釈〕 女郎花を

秋の長い夜をどのように明かして女郎花は、その朝の顔を見ると涙の露で濡れているのであろうか。

高野　晴代（日本女子大学教授）
高野瀬恵子（都留文科大学非常勤講師）
加藤　裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）
森田　直美（国文学研究資料館機関研究員）
時田　麻子（日本女子大学大学院博士課程前期修了）
曾和由記子（同博士課程後期在学）